羅史國字解

温

ヲ 9
4063
1

門ヲ
號4063
卷 1

袁

中

郎

流

瓶史國字解

插花量會

諸先生編合

千鍾房梓鐫

全部十三冊

n57294

瓶史國字解序

插花有法矣低昂俯仰長短疎密肥瘦正斜各得其宜而後可以觀焉蘭之低不可使之昂菊之仰不可使之俯杜蘅之畀不可使之高臘梅之疎不可使之密柳條之蕤欵不可使之髮

鬚。梅枝之横斜不可使之挺直。牡丹芍藥之肥似楊太真不可使之瘦如魚玄機。又各有儼偶使令賓主先後之不可犯焉。此乃造化自然之位置。而人不能用私意而易之者也。袁石公之瓶史。蓋取法於此矣。前有梨雲齋者。據石公瓶史建函花法。自稱宏道流大行于世。嘗刻瓶史於家。自為之叙。以授弟子青雲齋少游其門。親承口講指畫云。桐谷鳥習子。從青雲齋而受其法。自號練雲齋。善繼二先師之志而鳴于時。近為瓶史國字解

一篇而廣其義。我北山先生弁之題言以賞其志之厚。又自北山先生徵余序。余雖未知其人未觀其書。北山先生既寓之目冠之言。則博搜其故。泛辨其義。而有裨於函花者。流者。不誒余言而明矣。吾復何言。余曾聞之

徠雲齋。朝自沃水於瓶。自函花於瓶。夕坐其側。夜卧其下。對瓶玩花之間。喜躍狂舞而不知肉味。非但癖於花。又狂於花者也。余行逢徠雲齋而見之。則吾詢其前身於日者。ミミ若不曰狂蝶凝蜂之獨化。則必曰石公

之後身也

文化五年戊辰正月上元

鵬齋陳人興題

瓶史國字解序

古之好花者插之頭上閒其奇麗貴珍爲傲觀者如皆然後之愛花者插之瓶中添清宜靜室之雅趣大凡事不及古多矣唯此豫乎古耳然而瓶有小大矮高之形花之疎密正斜之態插之石立清新脫俗之法而寄雅

致則猥雜可醜也明袁中郎矯時
詩猥俗始唱詩之清新寫詩法於插
花述雜史於是乎插花眼目斂於閑
集蓋近世插花者流多私為一家亢
顏褻徒不若練雲齋之祖師練雲
高也據雜史建袁中郎一流插花
之確乎有淵源者也遠矣是亦好

事之書雜出雲集於其門梨雲
齋授其法於青雲齋練雲齋者
青雲高門人也嘗以為雜史彼邦
文字我邦兒女初學只所不易驗
通乃著國字解若干卷使人之得
輒讀之以知插花高雅致趣之
妙景仰其流者日多乎日出乎其

師功于甚遠不乏大功抑其人之
厚也其志之深也其業之孫絶亦
當以此推焉矣
文化五年正月人日
北山小信有撰
華堂丹素義書

既史中所不曰史生之所著
也亦史所著之久矣且春秋編
及後不復遂寂寥無可以為
規矩其課以國字授之以人使
吹索一覽而通曉凡彼之變

傳夫規矩者已規矩矣張或問生
員何子曰大匠教人以規矩學
者忘忘必以規矩作哉是言也
是以為嘉武之流去不流出稱
邪已流矣厚如百丈機渡江河
也今茲流雲為百習子以家藏
昔年受稱之作稱謂出之作
以生世事盡生張者規矩為
序而傳之詩曰不忘不忘由
舊事為習子之傳乎

文化五年戊辰林鐘六朔

荷雲為室蒙東洲

獅谷白蓮舎蔵書

明史卷二百八十八　列傳第一百七十六　勅修

文苑四

袁宏道字中郎公安人與兄宗道爭中道並有才名時稱三袁宗道字伯修萬曆十四年會試第一授庶吉士進編修卒官右庶子泰昌時追錄光宗講官贈禮部右侍郎宏道年十六為諸生即結社城南為之長間為詩歌古文有聲里中舉萬曆二十年進士歸家下帷讀書詩文主妙悟選吳縣知縣聽斷敏決公庭無事與士大夫談說詩文以風雅自命已而解官去起授順天教授歷國子助教禮部主事謝病歸久起故官尋以清望擢吏部驗封主事改文選尋移考功員外郎立歲終考察群吏法言外官三歲一察京官六歲試官五歲此曹安得獨免疏上報可遂為定制遷稽勲郎中後謝病歸數月卒云

梨雲齋傳

梨雲齋姓望月氏名義想俗稱調兵衛江戸人家世住篠輪津之西享保七年壬寅正月生文化元甲子歳九月死歳八十有三歳賦詩娯書又性自幼年嬉挿花常以謄瓶貯時花挿換之無倦人或謂之花癖予嘗讀袁石公所作瓶史沈潛翫味久之每與同好者談論嘆曰挿花之有瓶史猶禮樂有春秋遂舉瓶史一篇為之序表章其義申村其蘊以喻諸同臭侶自昔以来知而好之者蕃衍都下施及他邦於本朝瓶史開元祖也然而谷翫之為官舍之清賞市楼之幽事云瓶史並序文一卷既梓之家蔵

文化戊辰秋八月

青雲齋三百者東都湯島之産寛政九年丁巳歳正月十又八日死少し字挿花嘆好色之班色深入く表示而之瓶史を拠り隨習ふ人凡三千ヵ所至東流の挽方ヵ拙く知朝席上の式乃花は奥儀を發明して之を五書の秘と為く門人ヵ挽く愛ヵ於て東流の技芸を弘ろ既ヵ是色を集く光琳流乃浜垂を多くの為事と為ゆ芸を道く本郷ヵ住す隠逸猶ヵ和して兼ね茶道を嗜ヵ室中ヵ相阿弥流乃名山を打くハ和漢猪地の素色を眺ゆし好く酒を飲醉く法更ヵ愛ら可惜早逝なる事を悲ヵ瓶史を述を著すと以て焼亡す扱ヵ平常言瓶史を國字を為し挿花の色を要ヵ弘く為事を偽扱て云凍雲齋と計く遂ヵ國字を瓶史を注解す尚其瓶花を

枝の元所を即横花の図をかこれを等引が爲ゑ門人等多年
横所の瓶花の姿を寫し面直を原面を選ひて表中郎
流挿花図會と名く又同好友士宮垂慶乃花形を集併て
芸術せしを靖易ふ〻猶委図会九巻と成瓶史國字解
四巻を全部して十二巻を著呼遠ぶを得次け書を著
是徒卿幼學童蒙乃業瓶史として續易しめ其瓶史
乃意は老る枝葉の利助と爲て盡大家志乃爲は至
すべ乞裁枝は其清隨るを以て幾年を経とをられ

文化五年歳在戊辰秋八月望日

嶺雲齋 清水溪峨

春雪齋 藤田敏嵩 同誌

瓶史國字解卷之一

徠雲齋 桐谷鳥習 註解

瓶史 明 日本 袁宏道中郎 著

梨雲齋望義想校

瓶史瓶ハ花瓶なり史ハ志るすと訓すてなるめ乃ことを志るすといふこゝろなり此書物の表題を瓶史とつけしこと史の字史記の史の字なて深き意味のあることは挿花の枝の意味の深き玉極をいふなり

夫幽人韻士屏絶聲色其嗜好不得不鍾於山水花竹

夫幽人韻士屏絶聲色其嗜好不得不鍾於山水花竹

夫幽人韻士屏絶聲色其嗜好とハ夫と八費語とてものをつ出すぞしめの字なり幽人とハ隠者を稱していふなり易の文字なり隠者とふハ之とバ音の陶淵明まさ

宋の林和靖などいふるいの人たちのことなり韻士とハ韻の意ハ風雅といふ氣味士
ハ人といふ意なり聲色とハ聲ハ淫樂のことゝいんがくとハ人のこゝろを蕩す色のこと
ことにハ今の演戯歌三弦などのるいなり色ハ女色をいふ○屏絶すごハ屏ハしりぞけるこ
とよむ絶ハふやすことよミて畫人韻士ハ世俗とちがひて演戯三弦や女などハ嫌ミて皆屏
絶なりしりぞけ何を好このしむぞといふに○其嗜好とハ嗜ハさしむとよむ好ハすき
このむといふことにて其常に嗜てすきこのむことハ○不得不鍾山水花竹とハ山
水花竹とハ山谷川などのしぜんの風景草木の花竹などをあつめなさのむなり不得不
鍾とハ其自然の山水の風景草木に好このむことを鍾て外に嗜好することなき
をいふこれ畫人韻士たちハ世俗のすき好むしやうなりさミせんや女などハ嫌ミてたゞ
風流のことをそのり好このむゆへに山水花竹の自然の風景草木と眺めなさのしむなり

夫山水花竹者名之所不在奔競之所不至也

夫山水花竹者名之所不在奔競之所不至也

夫とハまくら辭のぞしをおこしめるなり○山水花竹者名之所不在奔競之所
不至也とハ名ハこゝに名人をさしていふ奔競とハわしりきそふとよむこゝにてハ
世間の俗皆金銀銭實の利慾に迷ひまさハひとよりも格別に出世をせんとし
まくハ名人の名をとりたがる事にておゝそひわしりきそふなりこれをこゝやくゝ色んと
いふなり然ニ隠者となりて山水花竹をなすほどなゞめなさのしミて色世の人おゝ
そひきそふものも色なくまさ利慾ニあらぞやうもんに色なりがらし因ゐ名
の至所でも色なしきそひわしる色の至所でも色なきといふそゝなり

天下之人棲止於囂崖利藪目眯塵沙心疲計算欲有之而有所不暇故幽人韻士得以乗間而踞為一日之有

天下之人棲止於囂崖利藪目眯塵沙心疲計算欲有之而有所不暇故幽人韻士得以乗間而踞爲一日之有

天下之人棲止於囂崖利藪目眯塵沙心疲計算とハ囂
と八天下之人とハ世の中のつねなる人の凡俗の人をさしていふ囂崖利藪とハ囂ハ
かまびすしとよむ崖ハぎしなり文章の作語なり利ハりかくのこと藪ハあつまるとよ
む文やぶとよむ字にてこれも文章の作語なり棲止とハ詩經の語にてすず
とゞまるといふこと目ハ人この眼なり塵ハちりとよむほこりのこと沙ハすななり眯ハ
ハちりほこりすなのためおりてくらくなりてまよふなり心疲計算とハ金銀

利慾の計筭ハ疲るなり○欲有之而有所不暇とハ前ハ云山水花竹のさのしを天下の世上一統の人ハ皆利慾のゝまびすしきありさまの塵泡のちりやほこりの吹起るごとくのなりに居て目もくらくらとまよひ心もきん狠利慾の計筭ハつれて山水のよき風景を見ても皆ひくくをりまて吃度我が色のまてさのしむそこの暇あるゝさる所有といふことなり○故函人韻士得以乗間而踞為一日之有と乗間とハびまついてといふこと踞ハうづくまるといふ字まて踞とハいかゝらといふことなり○故函人韻士の隠者達ハびまついて踞していかゝらまて山水花竹をわがものまて一日の有と為ことを得るとなり一日の有とハ有ハさまつとよむ字まて一日くとおすのことハそもそも其日くまゝのしを盡すなり踞とハ其山水の中ハ志ばくくの間もやすんじているといふことなり

夫幽人韻士者處於不爭之地而以一切讓天下之人者也惟夫山水花竹欲以讓人而人未必樂受故居之也安而踞之也

夫幽人韻士者處於不爭之地而以一切讓天下之人者也惟夫山水花竹欲以讓人而人未必樂受故居之也安而踞之也

無禍

丈幽人韻士者處於不爭之地而とハ隠者賢人達ハつねくゝ世の人の不爭ところの地ヲ處てといふことなり○以一切讓天下之人者也とハ世の中の一切万事の物金銀財寶田地田畑まてをハきこくよき名の名聞まてをも殘らず世の中のことを世上の天下一統の人こゝ讓て世を遁れて山奥ふかくへ引籠て居るといふことなり○惟丈山水花竹欲以讓人而人未必樂受とハ前ヲ出ごとく函人韻士の隠者達ハ居る處ヲ色人の爭ハぬ所ヲ居て一切万事の物をもつて天下の世の中の人ヲ讓て人と物を爭ハぬところ即今此山水花竹の自然の風景の好をも人ヲ讓與んとすれども世の人ハ元來利慾名聞かぞり肝しくて此山水花竹を受て我ものとして見て樂むことを未必ねがひ望ぬといふことなり○樂の字茲まてハ上摩まてねがふと訓ず○故居之也安而踞之也函人韻士達ハ世の人こゝハ山水花竹の風景を更てこのむことを樂ハ故ヲ色人韻士達ハ世の人の業さるところを我物ものて樂ミ眺めて其中ヲ居るゆゑヲ安穩まて世の人こゝより怨こ謗りを更に此中ヲ踞居て遊べども何の禍もなしといふことなり

嗟夫此隠者之事決烈丈夫之

嗟夫此隠者之事決烈丈夫之

烈丈夫之所為余生平企羨而不可必得者也幸而身居隱見之間世間可趨可爭者既不到余

嘆息するの辭なり決烈とハ決斷の義まて色のを思ひ限りの好といふのをもとき為り烈ハ猛烈の義まてそけしき氣象を云なり丈夫とハ大丈夫の人といふことなり○余生平企羨而不可必得者也とハ余ハわれなり生平とハ常平生といふこと企とハ足をつまだてゝ寫き所を三人とするの義まて今茲まてハ我及ハ如所を慕て羨ミ思ふてなり○此云意ハ嗟丈孟人韻士のごとき隱者の為事まて決烈なる大丈夫の人達のするところなり余平生ハ何卒隱者となりて山水花竹をこゝ樂まて居ゝねがひてもなり〳〵我身分ではなし必得べからざる者なり迚も出来ぬことなりと中郎先生自嘆息志ゝる辭なり○幸而身居隱見之間世間可趨可爭者既不到余とハ隱者のことまて世を遁れ隱れゝる人をいふ見ハ出奔まてけんの事なり〳〵ハ有の義まて世間をそむ

所為余生平企羨而不可必得者也幸而身居隱見之間世間可趨可爭者既不到余

嗟丈此隱者之事決烈丈夫之所為とハ嗟丈とハ

勢る人をいふなり義中郎今幸ハ隱者とも定まり〳〵又世間をそむいて務ることなく〳〵ず両方の間に居て何の用もなくひまなる身分となり居るなりそれ故に世間趨もと慕べき利欲も爭べき望も名聞のなきも既ハ余が身の上まで一向まで到ずして何事も用向ハ来ぬ因てひまなりといふことなり

遂欲歌笠高巖濯纓流水又為卑官所絆僅有栽花蒔竹一事可以自樂

遂欲歌笠高巖濯纓流水とハ遂まとハすぐにといふこころ歌笠高巖とハ前なる云ごとく逸人隱士のごとき隱者となりて山水の景木を眺め樂ミ楽きものと企羨ミ居ハ幸ハ隱者と平人との間に居ることまなりされハすぐまハ隱者の趣となりて山中へゆきて笠を高巖などに敷て山水を眺め樂んとなり濯纓流水とハ纓ハ冠の紐なり流水とハなるく水なり冠の紐などを山の間の谷河などまて濯ひ洗ひして風流の好を眺め樂んとなり此云意ハ是まて官位まなりて心勞してつれ〳〵心の垢を山水の好風流まで濯ひすゝぐんといふことなり譬ハ今俗語まで游山などに出て

こゝあの洗濯といふは和ごとこゝあり芝八楚辭は漢文の篇まである語まて隠者の趣き風流の文章あり○又為卑官所絆僅有栽花蒔竹一事可以自樂とハ卑官とハ卑ハびきゝともいやゝともまを字まて低き幾き官職といふことまて中郎先生卑下の辭あり為ハぶめといふこと所絆とハまとハるところつるがゆところといふことあり前は云ごとく隠者の趣とありて山は入て山水はてゝろを濯て樂こ爲さんとせゝどころあり又朝廷あり命を更て官位は召出されゝあり因て卑官の爲は身を絆されつるがれゝ故は家早隠者の趣をゝて山(行こともるゝ奴まよつて僅は花を栽竹を蒔の一事ありとそすこゝの遊の中(学ホを栽て以自ホゝとあり自とハ自分猶のこゝまて他人のさめまてハおゝ惟僅の学ホまて山水自然の風景の更は樂べゝとあり

而邸居湫隘遷徙無常不得已乃以謄瓶貯花隨時挿換京師人家所有名卉一且遂為余案頭物

而邸居湫隘遷徙無常不得已乃以謄瓶貯花隨時挿換京師人家所有名卉一且遂為余案頭物

而邸居湫隘遷徙無常とハ邸居とハ役屋敷の住居をいふ湫隘とハ湫ハ水つきの地面といふことまて清水おとの湧く地面あり隘ハ狭きことあり遷徙ハ遷ハうゝ居まて折こ家敷ゝて移り徙るあり芝ハ蟹ハ役屋敷あどの住居其上水つきの地まて栽物は悪ゝく狭き故は狭きあり因て無常にて常住でおきあり但ゝ時挿換とハ謄ハきもの形あり瓶ハ花瓶あり胴のふくれゝる瓶まて謄の形は似るが故は謄瓶と云あり前は云ごとく中水の更は学ホの花や竹のるいを栽て桃んとすれども水つきの地まて栽物は悪ゝく狭くゝて其上は遷徙役あゝと度こ屋敷更をゝて移り徙り学ホを栽る間もおきが故は已を得ず乃謄瓶をゝつて花を狩置て其時ゝは但ゝ挿換ておゝめ樂むあり○京師人家所有名卉一且遂為余案頭物とハ京師とハ明都のことあり北京あり名卉とハ草まは木まは通ふ字まて学ホを益さゝて卉といふあり案頭とハ案ハづくゝあり案ハづくゝのうゝといふことあり京師とて明都の中の人ゝの家は有所の所有名卉の花どもを求め集つて挿花とおゝるがゆゝは都中の名花一且のうちは皆遂余が案の頭の物と為といふ事あり

凡西中華まて八日本とハ家造も違ひて家の内は床をゝゝず畳を敷ず土間まて敷瓦あり人も立て居るが禮まてうちくつろぎて休息するまハ床九は腰を掛て そもゝおどする事あり因る物を置ま者の上は載て蓋あり其者といふハや

そり机のことなり今此才まて唐几とふ是なり挿花も其業の上小垂て眺めるごとなり床の間とふものハ日本ばかりまて外國ハ無きことなり是ハ因てわら業頭の物と為といくしなり遷生八歳四時花絶とふ花のことを書さる唐本まを水仙などの形きものハ盆種して以几ハあぐ可魏ものと書さるも皆此几の上のことなり几とハつくゑのこと盆種とハ鉢栽のことなり皆中華の趣如斯

無折剔澆頓之苦而有賞咏之樂取者不貪遇者不爭是可述也

無折剔澆頓之苦而有賞咏之樂取者不貪遇者不爭是可述也

無折剔澆頓之苦而有賞咏之樂とハ折剔とハ折ハ剔るとよむなり剔ハさくと云意なり澆頓とハ澆ハそゝぐとよむ水を澆ぐとふことなり頓ハやぶるとよむ又そゝぐとふ意なり又頓敗とて勞れ困ぶとハ賞ハもてあそぶとよむ又ほめとふ刻なり咏ハうたふと訓ふ宗なり吟咏とて詩歌なり作り咏ひ樂む義なり此云意ハ遊なるとハ栽植なり花ハ雨風雪なるとの時ハ折さり剔さりして外ハ有ものなれバ色ての害ハ逢ふなり又花のさゝ枝時も水なとを灌き色こ分抱して勞れ困ぶることもあり然るハ前ハ云こゝ瞻瓶をもつて花を貯へ置時くハ捻て挿風や雨雪なとハ折さり剔さりするごとの猶もなく水を灌き分抱して困ぶ即勞れるよふなる苦勞もなくて而賞咏のさのしこありとふことなり

○取者不貪遇者不爭是可述也とハこれ挿花ハ世間の名利ハを利ハ求もなくさゝ枝ハ花を他所ハ求め取ともを遇樂このことなてこれを取ども貪るハ求ばまと世の人事なりて挿花を眺めさのしこと遇者あれども爭競ふことハなし因而取者貪ず遇者爭ばといくしなり是挿花の事ハ風雅を嚴としてなるべくとふことを是可述とハ書さるなり

憶此暫時快心事也無狂以為常而忘山水之大樂石公記之凡瓶中所有品目條列於後與諸好事而貧者共焉

憶此暫時快心事也無狂以為常而忘山水之大樂石公記之凡瓶中所有品目條列於後與諸好事而貧者共焉

憶此暫時快心事也無拙以為常而忘山水之大樂とハ憶とハ嘆憤の
ごとくなり暫時とハ忽ち〳〵くの間といふことなり○快心事とハてゝもちをてゝよ
くすることなり拙以為常とハぶゝんをよく拙て常とのことゝ為といふ
ことなり而無忘山水之大樂とハ此云意ハ憶と嘆て此この挿花ハ玉極
好き樂とおれども唯暫時忽ち〳〵くの間の心を快心するのこのことまて深き
ことをハあゝぼ不断この樂とを拙て常のごとくして彼函人韻士の樂む所
の山水花竹の大樂の大ごのことを忘事なられといふことなり
右此二句の章ハ中郎先生挿花を説の本心をおせり今挿花をてあそ
びごのおの輩慈眼をつけて能く意味を察すべきものなり
○石公記之凡瓶中所有品目條列於後與諸好事而貧者共焉○石公
とハ袁中郎先生の號なり記之とハ此挿花の書物を編ごり著すといふ
ことなり凡瓶中所有品目とハ凡而この挿花一切のかもむき品々の條目
といふことなり條列於後とハ其挿花品々のかもむきを條目まして此末に要
書列著すといふことなり諸好事而とハ好事とハものずきといふことまて凡而
一切諸のものずきまてといふことなり與貧者共焉とハされバ此様なる風
流なる遊事まゝ此様なる風流なる書物を書列るも敢而世間の富貴な
して名利に耽る人やまゝ学問才智ある人に見せんとまハあゝず思うろく徘徊
人まても武又學問もなくまゝ智も経き人まても美も風流まて挿花茶湯
なとの数のものずきなる好事風流の人と共まて楽みなぐさまんといふことなり
△是迄ハ袁中郎先生の自序なり自序とハ此挿花のことを書物なせ
し事の譯を自分て書述るゆゑ(これを自序といふなり
△此序文のうちに挿花の道の大意を能悉く述盡しなるなり総る何
流に依らぬ挿花を説ぶ者ハ実に信すべきの説一なり

一花目

燕京天氣嚴寒南中名花多不
至即有至者率為巨瑞大畹所
有

燕京天氣嚴寒南中名花多不
至即有至者率為巨瑞大畹所
有

燕京天氣嚴寒とハ燕京とハ明の國の京都なり古戦國の時燕の都
なりしなり今も燕京と稱するなり即北京の事なり北の國故玉の寒國
なり故に天氣嚴寒とゝしなり嚴寒ハきびしきさむさといふことなり○南中
名花多不至とハ南中とハ南京のことまて是ハ南の國まて暖なる所なり

甚暖なる國より茗荷の名あり又植木の數色〻殖り来れども多ハきさらずとなり是ハ聖ていにぐ今日本まて伊豆國などハ暖なる國ゆへ蘭〻ぐひ極柑柑子の數多く出生るなり房州なども暖なる國故水仙なと格別早く生るなり扨又越後國信濃國などハ寒國ゆへ水仙などハ冬ハなし極柑柑子類ハ持行て栽ても花も開ず実をこのらぬ終ハ多く枯るなり然ともなどハ冬の間ハ室へいれて抱すれハ生を保つなり甚ごとくまて藝術のごとき寒國まてハ花き〻物すくなし故ハ南の方の暖なる國より殊独なる彫刻樹のさぐひ色〻来れども多く澤山ハ平〻ぼとおとなり

○即有玉者率為巨瑞大畹所有とハ即有玉者とハ前ハおごとく南中の暖き國より来るものすこしハ有りといへども率ハ巨瑞大畹さめる所有となり○大畹ハ大百姓のこと巨瑞ハ官官の事官官ハ天子の御側をつとむる役人まて縁外權威強きものと志るべし大畹巨瑞ともに富貴驕奢の人まて多く南中より名花を取れハ爭て貴取強く栽るゆへ実富のままハいく〻ぬといふことなり

儒生寒士無因得發其幕不得不取其近而易致者

儒生寒士無因得發其幕不得不取其近而易致者

儒生寒士とハ儒生とハ儒者のことなり寒士ハ貧窮なる士をいふなり茲ハいふ儒生寒士ハ中郎先生卑下の辞なり○無因得發其幕不得不取其近而易致者とハ其幕とハ幕ハまくといふ字まてこれハ富貴の人の園や花壇ハ張垂幕のことなり發とハ其幕をあげひらくといふこと此ハ意ハ此方どもの様なる儒生寒士の貧なるものハ其富貴なる人や權威強き人の園や花壇ハ張垂幕をあげ發きて見ることを得るまて何のよしなきものとなれハ見ることもなしぬといふことなり○不得不取其近而易致者とハ其近而易とハいふことなり其を近くの取易き花を取ら〻ぬといふこと〻なり

是ハ此風流の文章まて燕京ハ北京寒國故花もの〻すくなし南中の暖なる國より盃る名花ありといへとも率これハ巨瑞大畹の為ハ貴取れ此方どもの様なる中郎ことき儒生寒士の貧なるものハ其幕をあけて發き見ることなきもなしぬことなり因て其盃極の名花ハとても多まりすなおぬことゆへ其を近くして取易き故〻易きものをハ何まても皆取らぬといふことなし皆のこらず挿花まるしなるなり

夫取花如取友山林奇逸之士

夫取花如取友山林奇逸之士族迷於豕鹿身蔽於豐草吾雖欲友之而不可得

族迷於豕鹿身蔽於豐草吾雖欲友之而不可得

○山林奇逸之士とハ山林とハ山の木の立こゝゝるぞやーをいふなり奇逸之士とハ奇ハ変の中のつねの人とハ違ひて象象の勝れて珍しき人をいふ逸とハ隠逸の義まてこれも捨れるこゝまて奇逸とハ人を譽さる辞なり士ハ甚人をさしていふ奇逸の人といふことなり彼前ハ出世人歟士のるいまて山の林ハ引籠て居る隠者なりのことを譬へていへるなり

○族迷於豕鹿身蔽豐草とハ族ハ親族の族なり族ハ親族一族といふごとなり茲ハいふてろハ前ハ云山林奇逸の士といふべき人さちの親族一族といふごとなり迷豕鹿とハ豕ハいのことなり字まてこれも獣の事なり鹿ハ鹿のことなり○身蔽於豐草とハ身とハ其奇逸の士のことをさしていふなり豐草とハ草深くおひ茂りこゝるをいふ蔽とハ草の深き中ハおとれかくれ居るこゝろをいふなり○吾雖欲友之而不可得と八吾とハ中郎先生こゝゝらをさして吾といふなり。云意ハ吾この山林奇逸の士とも友ふべき人さちを友人ハせんと欲といへとも而も得へからさるなり

此云意ハ花を皆人ハ望へていやまるなり支花を取るといふも友人をこゝらゆるまゝくさるなり彼山林ハひき籠り居る奇逸の士とてよき隠者達を友人ハしておそびちくづうんとすれとも其隠者達の親族一族とも云ふべき人さ皆山ハ引籠居て其身豊草の草深く茂りこゝる中ハ蔽隠れて出れぬなり因ておれを友とせんと欲といへとも而得へからさると思ふまゝにハ奇〳〵ぬといふことなり。されハ今豊や山ハある所の花を取んとおもへ色〻の木や蔓なとのまきついて邪魔ハなり又ハ草深き中に忘げりかくれてどれが好き花やーを迷ひて出れぬなり左様ハ珍つらく取り悪き花を色こと今選して是ハ出れ〻心勞して探ね又ハ人をうけてやれこれと駕き取せることなど風流ハ手〻ぶしてハ則却為物ハして悪しきことなり警野山の花も通り路なとハ好花のさ〻出こゝるをつい通かりはを折て持行ことなどハ玉極風流ともいふへ珍つらき花を無理ま取るハ〻ぬことなり又價貴き花を重宝をうすハ甚鄙俗ましていやーく水風流玉極のことなり故ハ梨雪齋の瓶花の齋中ハかく儀例曰花品「除」凡勿「強索」雅「得と云

此章実ハ風雅の骨髄ハ遠ク遠カリ表ハ市の意能く味ふべし

是故通邑大都之間時流所共標共目而指為雋士者吾亦欲友之取其近而易致也

是故通邑大都之間と ハ通邑と ハ名の高き場所をいふ譬ハ日本ハ江戸京都大坂の場所伏見の場所などのたいをいふなり大都と ハ中華ハ北京南京などの都のこと日本ハ三都をいふ三都と ハ京都江都大坂これなり○時流所共標共目而指為雋士者吾亦欲友之取其近而易致也 時流と ハ時流の流行辞をいふ共標共目而と ハ人々皆見て評判して名目する雋士と ハ人々皆当雋士と ハ雋ハ俊と同じ意ハ人々皆見てあれがよきといふ上もの勝れたるものと為る所の者といふことなり○此云意ハ前ハ云所の山林奇遠の士ハ人々つゝしんで友人ハ人々皆是ハ通邑や大都等どの人多き所ハ

時流の流行ハ人々皆共ハ見て指して あれが雋士の誉れ者なりと謂矣する所の者を吾亦其人をもとめちゞきて是を友とせんと欲なり是ハこれ其ハ近ハ易ハ取ハ易者を取ハなり皆これ花を人ハ望ていしなり因而挿花も其ハ近ハ易ハ取ハなり前ハ云望山ハ深き中ハ隠れたり ハ遠方ハ取ハ寄セなどして求ハ花ハ不風流ハ凡俗の事なるが如ハ人々ハ通邑や大都の間ハ人々ハ評判して皆見て好といふ花を取て楽ハ事也これ其近而易ハ取ハなりといふなり

余於諸花取其近而易致者入春為梅為海棠夏為牡丹為芍薬為石榴秋為木犀為蓮為菊冬為臘梅一室之内苟香何粉迭為賓客

余於諸花取其近而易致者入春為梅為海棠夏為牡丹為芍薬為石榴秋為木犀為蓮為菊冬為臘梅一室之内苟香何粉迭為賓客

余於諸花取其近而易致者 ハ余とハわれと

いふこと於諸花とハ諸ハもろ〳〵と釋まろ〳〵の花ハ於といふことなり取甚近而易取者とハ前ハもこゝとく其ゑ近ハして取易花をどるといふことなり春為梅海棠夏為牡丹為芍藥為石榴石榴ハ秋落花摩為蓮為菊冬為臘梅とあり〔これ何れも挿花の上品ハ〕もつとも取易きものあらまゝを書出さるなり知れ様なきもの好き花ともを挿あらへて見る時ハ一宝之内皆悉何彩迭為賓客といふなり一宝之内とハ室ハ家なりハ室数多どのことなり此花を挿一室数の内といふことなり為賓客とハ賓ハ主ふと釋まゝまれびとゝなるきゝるゝやまふるどいふ釋ありて客を炎ふ義なり客ハ則客なりさて皆悉とハ悉皆といふ書物の客止の篇曰荀令君至人家室處三日悉とあり皆悉とハ一人ハ文若といふ漢の侍中となる尚書令ハ守ゝう此人常ハ鬢ハ悉を焚とめ〳〵ゆゝ他の家ハゆきて坐りていなる處帰りしあとゞ三日猛悉〳〵とあり〔されども〕これハ悉をとめ〳〵ぞりをいふまあゞ此人一体人品の美ことハ減ハ器量骨柄尋常の人ハ非さる故ゝくのごとく譽ていふなり何彩とハ是も客止の篇ハ何平叔と云人ハて姿儀美〳〵きことをいそんさなく面瑞更ハ白りり〳〵貌明帝疑其傅粉正夏月與熱湯熱既數大汗出以朱衣自拭色轉皎然此人生得美〳〵色白きこと白粉をぬりさるごとし〳〵因る

鉋の國の明帝これを疑ひ夏の暑き日ハ熱き湯熱をあつくるゝ既ハ數くらひ大汗を流〳〵自着さる所の朱衣ハて拭〳〵ハ面色いよ〳〵白くなりさるとなり是も色の美きをいふなりでハなし〳〵其人品の美ことを譽る也叔此去意ハ前ハもこゝとく花を皆人ハゝくゝされハ喜夏秋冬常ハよき土花を擇ならべ置〳〵うハ其雅ゝの花姿木の〳〵美〳〵くて色のある花もありてひと間の内ハこのごとく美〳〵き又達ゞかえるで逆ハ乗り賓客となりさるてろ揉まて結ハ皆今ゝ色ある何平叔ゞ粉を傳るやくゝハ色くゝゆる美風姿ともいふべき有様なりと云ことなり寔ハ弄姫の文章ハて其意味の深き事なり〳〵筆紙ハ述かきことなり

取之雖近終不敢濫及凡卉就使之花寧貼竹栢數技以充之雖無老成人尚有典刑

取之雖近終不敢濫及凡卉就使之花寧貼竹栢數技以充之雖無老成人尚有典刑

これとるこちゝといまあてこりおて取之雖近終不敢濫及凡卉ハ前ハ云四季の花色こあり甚ハ近ハて取之雖近終不敢濫及凡卉とハ前ハ云四季の花色こあり甚ハ近ハて取り易き花をとるといへどもといふことなり終ハとハ〳〵ハとといふこと敢濫

とハうゝつまてといふことなり凡奇と八凡夫の凡の字まてつねなる〳〵の者と式
ことを奇八筆まも本まも通ふ字まて草本をさして奇といふ是八尋常の
筆本といふことなり○此ゑ意八甚多迫まして取易花をとることゝろ
易〳〵と雖終ついに教て濫まして うゝつま常なる〳〵のやくさものと上物と
ひとつゆ取交ることなく〳〵といふことを凡奇ハ不及といふなり○就使之レ花
寧貼竹柏數枝以充之とハ就使之レ花とハ此花といふハ好上花のことなり
つねなる〳〵の凡奇のやくさものハ有てもやく〳〵ず上花の好花ハ之ともと
いふことなり寧とハいつそといふてろなり竹柏とハ竹ハ冬なり柏ハ松柏とつゞき
て此柏の字ハ常磐のものまて今ゑびやゝ考んそなれいぶき このてゞ〳〵なゞ
のるいの皆悉名と考るべし 今ゑ俗此柏の字をかゝまあて或ハうやまに充ハ
濫りなりかゝこハ擬この字なり教とハ色〳〵教〳〵の教といふこと貼て
とハ字書ハ貼ハ粘置也と註〳〵てづいちよつとつけおくことろなり以充之とハ
好き上花のなくて之〳〵き時ハ竹柏のるい是樹木の花ゑきものまそも
ちよつと擇て おき花の更ハせんとといふことなり○雖レ無老成人尚有典刑
とハこれハ詩經といふ書物の蕩の篇ハあることまして者の様者大德の
老成人ハ今ハなし〳〵といへども古ふ〳〵の老成人が作り おかれし典刑の法度の
事ゞ書物の中ハ尚殘りてあれハ今も甚深度を守り行ふまゝりて いことハ

ゑりといふことなり
○これ此意八花を取ことを近くの致易者をとるといへども終ついに教而
濫ハして充偽のやくさ花ととり交及ざず 就使よき上花なくて之
くても寧いつそ竹柏のあいの上物のよきを花ハなくとも彩〳〵の葉ごを
貼して擇て以これを花ハ充ん花のゝうりまぜんとなりこれ古ふ〳〵の換る
老成人ハ今ハなし〳〵といへども尚其典刑の法度ハ殘あるといふものまして花
のやくさものを上花ハ取交ゝうゝつま濫うハ〳〵き事ハせまゝきなりと此ことなり

豈可使市井庸兒溷入賢社貽皇甫氏充隱之嗤哉

豈可使市井庸兒溷入賢社貽皇甫氏充隱之嗤哉

豈可使市井庸兒溷入賢社貽皇甫氏充隱之嗤哉 豈可使市井庸兒溷入賢社貽皇甫氏充隱之嗤哉

とハいつゝそといふ義なり市井とハ市中町屋といふことなり腐兒とハつは
なこのものゝことまて凡俗の人をさしていふなり賢社とハ賢人達のなうま
といふことなり溷入せしめとハ溷ハこゝれ入ハいると訓こゝれいらしめると云
西朝隱士皇甫謐充隱とハ晉書ハ此書ハ恒此恥ハ時猶無隱士求濟
之給其資用使隱居山林微作

著作郎使回舜下詔徨徨時人謂之売隠さてこれハ中華そ
ハ隠士の學者を詔ことなり怒るよ晉の桓玄の時よりて隠士なし
桓玄これを恥て皇甫謐ゑ六世の孫希之と云者をやとひきこりて山
奥へかくしおきて隠士なりとて結て著作郎とす是こちらへ隠士よし
て賢物なり因て其時の人売隠とハ売ハあてるとも
彈いんよおてるとこと云なり
此云意ハ緻令花よ色しくて好き花少しとても凡俗のやくさ花を取
いれて上花のなうよ挿交るハ豊市井の町屋の富人とて凡俗人をや
とひて賢社の人達のなうまく溷入しむるごとくなりそれより人寧
のことよ竹や梅の常緑木の中の土物を挿て岡よ市をせるこそよ
けれなまなうよ隠士なきとて皇甫武希之ゑ隠士のごとうきよ儻
しを時人よ売隠とて虫しゑごとくなる花も凡俗のやくさ花をことうき
よ挿て諸人の眼を汚ゑよ賠ことなりれとよこと云なり

二品第

漢宮三千趙婕第一

邢伊同幸望而泣下

故知色之絶者蛾眉

未免俛首物之尤者出乎其類

品第とハ花の上品をわけて雅俗の品をわけ次第の位を列するなり
○漢宮三千趙婕第一 邢伊同幸 望而泣下 とハ漢宮三千 とハ漢の
成帝の宮めし三千人ありしなり 三千人 女なりし前漢書外戚傳よ曰婕
の皇后趙飛燕婕妤て趙昭儀といくし 女人なりし 妾人まて帝の寵愛を溺さり
者顔寵幸千餘幸といつり 光者なるゑ妾人
而婕妤ハ勝れしゑ 故よ漢宮三千人の中まて趙婕妤第一といふなり 邢伊同
幸 望而泣下とハ邢夫人伊夫人とて二人共よ妾女まて是ち漢宮三千
人の中なるゑ邢夫人伊夫人と同帝の寵愛をうけしとき邢夫人自ハも
ひらく凡我よ及妾人ハあるまじと思しよ今如斯伊夫人の寵せしゑ
疑しそ遂よ伊夫人の宮よ泣て云るよ実よ無愛の妾人なりけれバ夫よ
感嘆して泣を下しうといふことなり益よ今此幸をかりもちゆるごとろハ
花の上品の正しきものと凡俗のものとをわけておんとて皆花を妾人まさ
とて女の妾恋あるを挑ことなりせり○故知色之絶者蛾眉 未免俛首物之尤者出乎其類

俛首　物之尤者出乎其類とハ色之絶者とハ色のすぐれさるものハ
といふことなり蛾眉とハかひこ虫の眉をいふ美人の眉まゆとなるなり詩經ニ
見ゝ侵首　とハ俛首とハ首をさげて降伏するをいふなり
此去意ハ漢の玄女三千人の美人の中まても事一ハ趙姬　邢伊いたれ
ち美人なれども伊尹又ハ邢尹人なり勝なり　攻　我知女色の絶さる
ものハ刑尹人のごとき蛾眉とちいふべき女なれども又其上の美人ありて
柔俛首して降参することを免ず物の尤者すぐれるものも事さ其類
のくちより好け出ることを知りとなり花もそのとおりまて好が中まも
ゝ其上の上花ありとてろ〻盈きことなり

將使傾城與衆姬同輦吉士與凡才並駕誰之罪哉

將使傾城與衆姬同輦吉士與凡才並駕誰之罪哉

傾城とハ美人の猶ほして漢書李夫人傳ニこゝより衆姬ハ尋常の
なるゝの女をいふ輦ハ御車なり吉士ハ賢者よきもの善りの人をいふ
凡才ハ尋常の位の愚人をいふ駕ハのりものゝことなり

此去意ハ前ニ去ごとく美人の上まも〻絶さる美人ありて兎角俛首し閉口
することを免ず將ニ珠を飾る袵の美人と衆姬の尋常の女と同じ輦ニ
載又吉士のよき賢人と凡才の愚人と駕を並べ乗めんことをするハ誰が罪
哉これ即吉士といふ様なる上品の雅花を徒ニ衆姬や凡才の愚人の様な
やくぎ花と紛を同じ車に並べむることをするハ誰が罪哉これ
則掃ふ人の罪なりといふことなり

梅以重葉緑蕚玉牒百葉緗梅為上海棠以西府紫錦為上牡丹以黄樓子緑蝴蝶西瓜穰大紅舞青猊為上芍藥以冠群芳御衣黄寶粧成為上榴花深紅重臺為上蓮花碧

梅以重葉緑蕚玉牒百葉緗梅為上海棠以西府紫錦為上牡丹以黄樓子緑蝴蝶西瓜穰大紅舞青猊為上芍藥以冠群芳御衣黄寶粧成為上榴花深紅重臺為上蓮花碧臺錦邊為上

臺錦邊為上木犀毬子早黄為上菊以諸色鶴翎西施剪絨為上蠟梅罄口香為上

木犀毬子早黄為上菊以諸色鶴翎西施剪絨為上蠟梅罄口香為上

○重葉梅　花鏡曰重葉花頭甚豐千葉開如小白蓮　これハ八重の白大輪なり

○緑萼梅　花鏡曰凡梅附帶皆絳紫此獨純緑　これハ青ぢくの梅なり

和俗語てきやくかく梅といふ萼蕚小枝も青し単瓣なり子葉なり単瓣のものハ実を結ふ子葉のものハ多く実を結ばず

○玉牒梅　花鏡曰花頭大而白紅色甚妍可愛　これハ薄紅なり

紅梅和漢通名葉頭紅而開后淡紅色者和俗未開紅といふこれなり

○百葉緋梅　花鏡曰本名黄香梅花小而心瓣亦黄香烈

遵生八歳四時花紀曰梅花七種尋常紅白之外有五種如緑萼蕚純緑而花蕚亦不多得有鶴翎梅花開柔向下有子瓣白梅名玉牒梅有単瓣紅梅有復瓣紅梅皆奇品也種々可観

○海棠西府　遵生八歳四時花紀曰海棠花七種有燕脂色如殊紅有木瓜紅有西府有樹海棠二種一紫一白有垂絲海棠

○海棠紫錦　棠叫絲蕚甚云々

○海棠西府紫錦共来淳　花鏡曰有西府海棠一種未言其形狀

七種海棠花色白淡紅帶一蕚花紅白相交有深紅有紅色少色淺者和俗曰牡子美海棠色濃者曰菊糸海棠皆花下垂せずして上ゑ向ふ別ゑ一種花下垂するものあり糸絲海棠といふ色深紅即集鮮垂絲海棠といふこれなり

西府の名のこゝありて来其形狀を考ぶに紫錦ハ来何の書ゑも見来らず遵生八歳ゑ樹海棠二種一紫一白とあり恐くハ此紫ゑ〳〵ふれども今日市ゑハ紫白とも見ず只前ゑ出杜子美海棠と南糸海棠と此二種上品なり

○牡丹黄樓子

○牡丹緑蝴蝶　花鏡曰一名萼緑花千瓣色微紅蒂綠ゝ　これハ蒂蒂大瓣の淡紅なり

○牡丹西瓜穰　花鏡曰内深紅邉淡ゝ　これハそこ紅の花なり

○牡丹大紅霧青覗　花鏡曰大紅色中心五青瓣ゝ　これ花の中ハ青きしべ五へんあるなり

○牡丹和名をもうぐさ

詞花集曰関白大政大臣藤原忠通公の歌　さくらゐろにそめるまて
こんかせしうすくそれのあとまるくそめる色は班歌は寄てたのもうぐさの名あり

○ちうこぐさ

延喜式の古名なり今用ひず　和漢通名牡丹と稱す異名諸書に數あるこゝに畧す

種類市數多花鏡に一百三十一種を載群芳譜に一百八十三種を載日本にても年々增長す古の品類地錦抄に悉く載中華にハ牛黄姚黄の二種是上品なりと
いふ初牛姚の二氏より出るなり黄の花なり紫の花中の上品なり黄花の者日本にハ
初て紫の花を出すゆへに名づく是も花中の上品なり黄花の者日本にハ
ハ黄梅子といふものいつれの書にもをゝ九梅子といふハ花の二階にあ
りこれをさして梅子といふなり因に
おそ〳〵ハ班牛黄姚黄のゝぐひなるべし

○芍藥冠群芳　花鏡曰大抵心冠子深紅堆葉頂多四五瓣其英密簇廣及半尺
高可六寸豔色絶倫ゝ

○芍藥御衣黄　一名御袍黄　花鏡曰色初深後淡葉疎而瘠肥碧ゝ

○芍藥寶粧成　花鏡曰色淡紫有十二大葉中密生曲葉周畏圓抱
高八寸廣半尺小葉上有金緑點多ゝ

芍藥一名將離といふ離別の時の贈物とするせばなり異名諸書に數多しと
いへともこゝに畧す中華にハ揚州の芍藥浴陽の牡丹と稱す揚州芍
藥譜に三十二種を載す廣陵志芍藥譜に三十一種を載群芳譜に三十
九種を載す陳漢子秘傳花鏡に八十八品を載日本にハ年々品類多く
成る和の品類ハ地錦抄に詳なり

○榴花深紅重瓣　一名安石榴

和名ざくろ

遵生八牋四時花紀曰榴花八種あり
蘂中有多瓣白多瓣黄大紅者比他處不同
中心花瓣如蕊拗產渭之重瓣若榴花形類大而色更紅
深余曾四種俱帶回杭五今芳郁有四色單瓣ゝ

日本市中ハ多く売り実の甜きもの酸きもの二種あり薬ハ用ゐハ甜き者を上品とす食ハ用ゐハ甜きを上品とす多く一種実の白きものあり葉解ハ水晶石榴これ有り和名ざくろ凡百実を結ぶ樹ハ単瓣多りこれを実ざくろと云ふ花の蕚長して実の如く形五つに分れて深紅単瓣の花開花散て蕚葉を成す是所謂深紅重蕚多り榴の上品吉士さいつべし別ハ花ざくろと云ふもの多り紅白淡紅三種子瓣花大きて実を結ハす満瓣して淡色花品いやしくして俗物多り瓣花ハ甚嫌ふまた中華ハ黄花の者多りと云ふ日本ハ多し多く別ハ実石榴三種和名朝鮮ざくろ。唐ざくろ海石榴と国物多り小本まして葉花菓ともに小多り色紅色粉紅三種あり甚佳多り可愛

○蓮花碧蕚

花鏡曰白瓣上有翠點房内復抽緑葉出ゝ
これハ白花ハ蕚の點ありて房内ハ復緑の葉を抽ゝる多り

○蓮花錦邊

花鏡曰白花多瓣邊上有一緑紅暈或黄暈出ゝ
これ〳〵りとりのことあり

○木犀毬子

蓮生八歳四時花迄曰木樨花四種あり

○木犀早黄

金黄花白花黄花結子四季花雖金粟為最葉邊如鋸齒而
紋麁者甚美甚香出ゝ

○菊諸色

○菊鶴翎

花鏡曰千葉蓼差多出ゝ

○菊西施

花鏡曰多葉嫩黄色出ゝ

○菊剪絨

諸色剪紙二品出ゝ

菊種数甚多日本尚年〻種数増長すふ〻おもてきく。てゝじぐるま。せんまんざさ。ちぢきく。これとふきく皆上品多り

○蝋梅磬口香

綱目ハ蝋梅　釋名黄梅
梅同」時珍又相近色似蜜蠟」

時珍曰此物本非梅類因其無葉時珍曰蝋梅小樹叢枝夫葉種凡三種以子種出不種レ接者
臘月開小花而多淡色名豹蠅梅種接而花蕚而多濃色深黄如繁櫻者名櫻桃梅最佳結実如金鈴樹皮浸水
麝黒有毛彩ゝ
和名うらむめ　唐京むめ　今らうばい通名多り　一名寄友　紺珠

一名九英梅　品字箋　一名荷花梅　俗稱

後水尾帝の時始て朝鮮より貢す其以前ハきハめて珍きものなり元和慶ハ
ゑし種子を傳てそまて八多し種子ハ下すハ能活す又條を挿ハ能
活す葉長大而光沢あり冬梅花と同時ハ花開淡黄色ハ
して光澤あり蠟色なり細き能九瓣中ハ鬱のごとき能九瓣あり色淡黄なるゆへハ集解ハ
九瓣なるゆへハ品字箋ハ九英梅の名あり集解ハ檀香梅とあるハ緋梅の上品なるなり和俗是を
狗蠅梅の名あり集解ハ檀香梅とあるハ緋梅の上品なるなり和俗是を
唐緋梅といハ花深黄ハして能五瓣梅花のごとく香氣強ハ凡而蠟梅
花ハ下垂するものなり又素に梅ハ同物なり集解の説ハ種ず
擅香梅も花開て後ハ垂れども半開ハ十分ハ開ず含口なり此五瓣の者ハ馨に
香なり緋梅の最上品なり今日本ハ此五瓣の者と二品の外ハ

諸花皆名品寒士齋中理不得悉致而余獨叙此數種者要以判斷群蕊不欲使常閨

諸花皆名品寒士齋中理不得悉致而余獨叙此數種者要以判斷群蕊不欲使常閨

閨豔質襍諸奇艷之間耳

諸花皆名品寒士齋中理不得悉致と八諸花とハ諸ハもろ〳〵といふ字
まて也ろ〳〵一切の花といふこと皆名品とハ前ハ也ぐれたる花ばかりハかぎ〳〵ず
其外ハ一切諸の花ハ何ハ寄ず皆名花上品なりといふこと也寒士齋中
とハ寒士といふハ前ハ云ごとく貧なるものといふなり但この貧なるものといふ
ことハ全此邦まて無乏ハ貧乏ハして困窮するものの影ハ多ず此寒士といふハ諸
國ハ孫まれて貧乏ハして業職のつとめハ疎く無
庶人夫のやうハ大身まて八おく知行も少く役目も軽くして僅ハ小身者と
いふ義なり齋中とハ家の内といふこと也理とハ理ハ不得悉致と八理ハ不得悉致
と悉くいろ〳〵澤山ハ揮毫ぐるごとハ多ずといふことなり○而余獨叙此
数種者要以判斷群蕊と八余ハ獨叙此数種とハ叙する八叙泥す
るといふことまて此種ハ上品の名花を数の種を余獨品同して書列ぬる
ものハ何故そといふことなり要以とハ要とハさきぐきてといふことなり
いふことなり群蕊とハ群ハ多〳〵ばるといふ字蕊ハ〳〵ばーきさきりの花といハ
ことまてやそり群花といふてろなり判斷とハものの美惡を考へ分る

ことなり其色々のかはりある花の美悪を考へわくることなり○不ㇾ欲ㇾ使
常園鑑賞襍中諸奇異之間ニ耳とハ常園鑑賞とハつねにわがやの中に
居る妻にて通例の美女のことなりされハ凡而皆花を美人にたとへされバ是も
つねなミの珍しからぬ花といふことなりされども凡俗のやくさ花にハあらず上花
なれども、ふだん側に在りて珍しくなきものにたとへたるなり諸の奇異とハ
前に書つらねたる花のるい上花の中にても又格別に珍しき花ども之
其格別にもぬけざる花を奇異といふ珍花なり但今和俗時にあらざる花の
めづらしきものを持来りて珍花とてもてはやす是俗物の好所にして風雅
とハいふべからず凡而時節ならぬものハめづらしくまちがいたるものなり此奇異珍花
といふハ其時に盛りのものにて譬へバ春二月梅盛に梅花澤山の中にて其類
をもぬけて極上品上花にして外に類のなき名花を珍花といふなり或ハ秋九月
菊の盛に其類をもぬけて外になき名花を珍花とも好花ともいふべきなり総而
時に盛のものゝうちにて上品名花を撰て用ることなり不ㇾ欲ㇾ使下襍中耳とハ
襍ハ雑の字に同じ字まじハることなり○此文意ハ前にいふごとく四季とも
いろくの諸花名品珍花ありといへども我等ごとき小身ものにて寒士の斎
中のかざりに取入ることハおよびもせず理なり悉く設すことを得ざ
るなり而に余独此数種を書あらハして叙述する子細ハ何故ぞといふに
要さへぎりて以群芳の盛の美悪を判断して考へわけて常園の鑑賞の
不斷常住側に居る珍しからぬ上花ども又ハ奇異の格別の珍花の間
にハ襍しまじるごとをバ欲せざるがゆへ耳といふことなり

夫一字之褒栄ニ於華袞ニ今以ニ蓝官之董狐ニ定ニ華林之春秋ニ安得ㇾ不ニ厳且慎ニ哉孔子曰其義則丘竊ニ取之ニ矣

夫一字之褒栄於華
袞今以蓝官之董狐
定華林之春秋安得
不厳且慎哉孔子曰
其義則丘竊取之矣

夫一字之褒栄於華袞とハこれハ春秋経といふ書物
にあることなり春秋経といふハ孔子の編さまつる書物にて文中一字づゝを
もつて褒貶せられたるなり故に一字の褒を書るなり栄ニ於華袞とハ華ハ
光華の義にて立流なることをいふて衣袞とハ袞ハ天子の禮服にて九章の
服なり袞の字巻るといふて衣に巻たる龍の容を織出したる御
服なり華袞とハ光華ある袞服といふことなり○今以ニ蓝官之董狐ニ定ニ

華林之妻紋とハ蕊官とハ花掛りの役人なり董狐ハ古く人の善惡を記して少も私の邪りごゝろなることを書記さず故に孔子も董狐ハ古の良史なりと褒られしゝ今花の善惡を判斷して記す役人なるゝ。安得不嚴且慎哉とハ安とハおぼかくゝとゝふこと嚴とハ嚴密なりとゝふこと。なり。毫厘之意ハ春秋經ハ一字の褒貶に與れバ末代名を揚るゆゝ天子となりて華衰の服を衣るゝよりも榮花なるなりとするなり。今善惡宣の花役人まて董狐ともゝふべき孫ハ能花の善惡を判斷し考て以花林の中の妻紋經の褒貶の法を定なり然ハ男ハおぼかくハ嚴密ハ正性ざることを得ざ花の美惡を能分ゝ。孔子曰其義則丘竊取之とハ丘ハ孔子の名也此語ハ孟子の離婁の篇ハ見ゝ。こゝ茲ハ出意ハ春秋經ハ魯國の記錄なり。孔子の子を入て一字の褒を以て古今天下の人を賞罰せゝれし故其義を立る所ハ則丘竊ハ此語を引意ハ孔子も妻紋經一字の褒ハ自分の子簡を以義を取て賞罰せゝり。表中郎も亦花の美惡を判彰するゆゝ善子簡を以てするとゝふこと也

瓶史國字解卷之一 終

瓶史國字解